

このコラム前々回で紹介したメールのやりとりをもつ一件。〇六年五月二二日、私からマルクへ「……昨日の土曜日、僕たちは横浜へでかけて二つの集まりに参加した。午後は『神奈川九条の会』が組織した政治集会にだ。……晩は日本フィルの演奏会。メンデルスゾーンのヴァイオリ

ン協奏曲とストラヴィンスキーの春の祭典などが演奏された。

このオケが前進座に匹敵する激動の半世紀を持つことを知ってほしい。六〇年代末にオケ団員は、高度成長下

日本フィル横浜定期演奏会

の春闘でかなり上昇した工業労働者の賃金と比べての低賃金を改善すべく労働組合を結成した。年末の第九の演奏会がストでストップされた後、経営者（フジテレビと文化放送）はオケの解散を決定し

た。対抗して楽団員は『自主管理』を開始した。彼らは自身の音楽活動への支援を訴えながら、自力でコンサートを組織した。

私を含む多くの人々が、爭議支援の運動に

加わることでクラシック愛好家になった。楽団は多くの市民との連携を深めることで自立し強化され、この数日後にはヨーロッパ演奏旅行に出発する。五月末近く、ドレスデンとプラハで、この横浜コ

ンサートと同じプログラムで演奏する。……」翌日、マルクから私へ「……そのオケの自主管理の話に僕は大きな関心を持つ。フランスにやって来ないのが残念。……」

私は労働問題研究者として、爭議団運動を戦後日本労働運動の重要な柱の一つと認識している。優雅なピアノ奏者の松本伸二さんが東京争議団のコンパで荒武者的活動家たちにお酌して回っていた姿

も忘れない。

東京の定期演奏会、冬の九州（福岡あるいは小倉）演奏会と通い続け、四年前からは横浜定期の会員となった。

この正月の一二日土曜六、八時、みなとみらいホールで開かれた定期演奏会三三四回では、サンサーンズのオルガンシンフォニーが演奏された。ホールの大パイプオルガンがブワッと鳴ったときは全身ゾクゾクの感動。三月八日の次回コンサートに皆さまも是非！

下山 房雄